

# 文学部

## 1. 「学習成果の可視化」に向けた取り組み

### (1) 現状の説明

多彩な科目を提供している文学部においては、学習成果の可視化について、どのような規準を設定するかが問題となる。文学部では、学部の三指針（「生命の尊厳の探究者たれ！」「人類を結ぶ世界市民たれ！」「人間主義の勝利の指導者たれ！」）を踏まえて、可視化のよりよい統一的規準として、新しい学部専門科目の学習成果（ラーニング・アウトカムズ）を掲げた（1-1）。そして、それぞれの科目（およびその背景にある学問的蓄積）と学習成果（ラーニング・アウトカムズ）とが、どのような関係にあるかを、各科目担当者に対してアンケートを実施して調査した。アンケートへの回答を通して、担当科目とラーニング・アウトカムズとの関係を強く意識して教育を行い、可視化の規準であるラーニング・アウトカムズを意識したシラバス構築を推進するためである。

### (2) 点検・評価

#### 1) 効果が上がっている事項

各科目とラーニング・アウトカムズとの関連を密接にするために、本年度は、全文学部教員を対象に、担当する学部専門科目とラーニング・アウトカムズとの対応を調査するアンケートを行った。回答が得られた 232 科目（演習・卒業研究を除く）の結果が次表である。（1-2）

|     | ①   | ②  | ③   | ④  | ⑤  | ⑥  | ⑦  |
|-----|-----|----|-----|----|----|----|----|
| ◎   | 95  | 39 | 43  | 18 | 27 | 2  | 2  |
| ○   | 52  | 34 | 76  | 59 | 51 | 43 | 14 |
| ◎+○ | 147 | 73 | 119 | 77 | 78 | 45 | 16 |

#### 【文学部ラーニング・アウトカムズ 再掲】

- ①人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解、鑑賞、評価することができる。
- ②母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる。
- ③基礎的・専門的学知に基づいて、新しい知識と表現を創造することができる。
- ④論理的に思考し、適切な方法で情報の取得と処理を行い、物事の的確な判断ができる。
- ⑤文化の多様性を尊重しつつ、世界市民として、生命の尊厳と平和を志向する。
- ⑥学ぶことの意味を理解し、自律的学修者として、目標をもって自己の成長を図る。
- ⑦人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する。

調査は、①～⑦までのラーニング・アウトカムズに対応して、担当科目に「◎」（特に到達すべきアウトカムズ、1個）と、「○」（到達すべきアウトカムズ、2個まで）を記入する方式で行った。

得られた数値からは、次のようなことが読み取れる。

1. ①③の数値の高さから、学部専門科目は、知識を修得するラーニング・アウトカムズとの関連が深いと、教員が意識している。
2. ⑦「人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する」と関連する科目が少ない。ただ、今回は必修である専門演習（ゼミ）および卒業論文研究については聞いていないため回答がないが、およそ50に上る学部のゼミの多く、および卒業論文研究（ゼミ生たちが意見を言い合い、協力して論文を作成する姿をよく目にする）において、この⑦の項目に◎や、とりわけ○がつけられるものと思われる。
3. ⑥「学ぶことの意味を理解し、自律的学修者として、目標をもって自己の成長を図る」のラーニング・アウトカムズは、「到達される」（○）とする科目は一定数あるが、「特に到達される」（◎）とする科目が少ない。この点については、必修の初年次導入科目「アカデミックスキル基礎」が16クラスあるが今回のアンケートでは1クラスにカウントされていること、および2年次の必修科目「アカデミックスキル応用」23クラスが今回回答に入っていないため、実際にはこの項目に◎が相当数つくものと考えられる。
4. ②「母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる」というラーニング・アウトカムズは、「特に到達される科目」（◎）が一定数ある。その理由として、「Global Issues in English B I、Translation A I」など、外国語に関連する科目が多いことが考えられる。一部は、講読の科目に関連づけられているが、講読文献が英語やフランス語、中国語であるなど、外国語に関わる科目である。
5. ④⑤のラーニング・アウトカムズについては、一定の関連科目が存在する。④は文学部において卒業論文の作成が必修であるため、教員が多くの科目において論理的思考や情報の適切な処理の方法を教えるからと考えられる。⑤は文学部の三指針の最初の2つが教育にも影響を与えていると考えられる。

なお、調査の際、併せて「授業で使用しているルーブリックや独自に実施しているアンケート」があるかどうかを尋ねた。数人から回答が寄せられた。授業全体のルーブリックはないものの、定期試験やレポートの採点基準としてルーブリックを使用している授業が見られる。また、試験成績と連動しない形で、授業内容の理解を把握しているアンケートなどもあった。ラーニング・アウトカムズ調査の補足として調査したが、積極的に回答を寄せる教員がいたということが重要と考える。

また、全学的な取り組みであるが、授業全体の学修成果の可視化として、シラバス内に「評価・試験方法」を書く欄があり、そこで、試験・レポート・日常点などの評価割合の大枠が示されている。

## 2) 改善すべき事項

本年度は、専任の教員に対するアンケート調査を行ったが、今後は他学部兼任の教員や非常勤教員に対しても、ラーニング・アウトカムズとの関連調査を実施する必要がある。

また、ラーニング・アウトカムズの⑦「人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する」の項目については、今後さらに専門演習や卒業論文研究においてこの項目との関連を意識した積極的な授業展開の取り組みを進める必要がある。

さらに、ラーニング・アウトカムズが各科目の「到達目標」にどう取り入れられているかが明確になっていないので、全学の共通科目と同様に、システム上のシラバスに、ラーニングアウトカムズの各項目と当該授業との関連付けを明記できる欄を設ける必要がある。

## (3) 将来に向けた発展方策

### 1) 効果が上がっている事項

現に担当している科目がラーニング・アウトカムズとの関連で、どのように位置づけられるかが、一定程度意識付けが出来たと思われる(1-3)。こうした科目とラーニング・アウトカムズとの関連については、今後も継続的に調査していく必要がある。

なお、授業で使用しているルーブリックなど、学修成果を可視化するツールが、どの程度使われているのかを調査していくことも必要である。今後、文学部全教員を対象に調査を進める方向で検討している。

全学的な取り組みである、シラバス内における「評価・試験方法」の明示は、今後とも遺漏なく記入されていることを確認していきたい。

### 2) 改善すべき事項

学習成果の可視化に向けた発展方策としては、7つのラーニング・アウトカムズの各項目を学生がどの程度達成できたのかを、それぞれの項目を統一的な基準で測定するための学部共通のルーブリックを作成することである。現在作成準備中であり、これを学部の全教員がそれぞれの担当授業の到達目標を測定する場合に、たとえばスコア2以上(最高は5)の者に単位を認定するなど、成績評価のための基本的な準拠として用いてもらうようにしたい。

なお、今後、兼任・非常勤を含む全ての科目において、ラーニング・アウトカムズとの関連を調査していく必要がある。

#### (4) その他

「学習成果の可視化」の一環として、成績とは連動しない形で、学生の学習者としての自覚、人間関係力（友と助け合う力）等の変化を見る、ルーブリックによるアンケート調査を行った。これは AP の一環として全学で実施し、教育改革の効果を測ろうとする試みで、経年変化を見るために、卒業までに 3 回測定することになっている。文学部はパイロット的にまず 1 年次の必修科目であるアカデミック・スキル基礎の学期始めと学期終わりに実施した。アンケート項目は本学の CETL（教育・学習支援センター）が用意してくれたものに、文学部独自のものを加えて作成した。経年の変化を見るために、卒業までに 3 回測ることとし、まずは 1 年次の必修科目であるアカデミック・スキル基礎の学び始めと学び終わりに実施した（別添 1－4 参照）。16 名中 15 名の担当教員（ひとクラス平均 25 名の学生数）が意識調査を行い、回答数は学期始めが 381 名、学期終わりは 341 名であった（85%以上の回答率）。①学びの計画性、②学習者としての自覚、③人間関係力、④文学部生としての自覚、（それぞれ最高 9、最低 0 で 1 ポイント刻み）について調べた結果、①は学期始めは 4.66→学期終わりは 5.16、②は 5.56→5.84、③は 6.58→6.06、④ 6.03→6.07 であった。4 か月という短期間であるが、①学びの計画性、②学習者として、また④文学部生としての自覚は伸びつつあることがわかる。③人間関係力はポイントが下がっているが、「今まで友人はいたが、勉強面で励まし合う友人を特に意識したことはなかった」→「自分から周囲に話しかけ、グループ活動では他のメンバーと協力し合えた。ただ課題と関係ないおしゃべりもあった」となっており、謙虚な自己分析が数値の減になったと考える。今回を第 1 回とし（マイルストーン）、第 2 回（タッチストーン）を 2 年次の必修科目の学期始めと学期終わり、第 3 回（キャップストーン）を 3 年次必修科目の学期始めと学期終わりに行いたい。教育効果（＝学習成果）を学生自身の自己分析を通して見ることは大事である。

#### (4) 根拠資料

1－1 2016（平成 28）年度文学部自己点検・評価報告書「ラーニング・アウトカムズの測定状況」

1－2 別添「文学部：専門科目と学部ラーニング・アウトカムズとの関連表」（232 科目）

1－3 アンケート回収率 93.9%（回答対象 49 名中 46 名）。

1－4 別添「文学部学生意識調査」（回答数：学期始め 381 名、学期終わり 341 名）